

# 南三陸ノート（8）

— 2019年の南三陸 —

杉田 孝夫

はじめに

1. 最近の漁業環境
2. 若手漁業者の挑戦
3. 農業の可能性
4. 南三陸の将来—郷土史から考える
5. 震災から9年目の役場
6. 生涯学習センターの役割  
—志津川公民館長兼図書館長佐々木仁一さんに聞く
7. 社会福祉協議会「結の里」再訪
8. 伊里前の近況

むすびにかえて

付録：歴史に刻まれ、今に生きる「共助」—大船渡市日頃市町長安寺

## はじめに

東日本大震災から9年が経った。公共施設も一通り出来上がり、インフラ関係では、入谷公民館と消防署わきに設置が予定されている警察署を残すだけとなった。



南三陸町消防署 2019.9.2

12月17日震災復興祈念公園がようやく一部開園した。「祈りの丘」の頂上に震災で町内で亡くなった804人の名簿が納められる「名簿安置の碑」が設置され、合わせて「復興祈念のテラス」が作られた。

町職員43名が犠牲になった旧防災対策庁舎の近くにも行けるようになった。

三陸沿岸道路も仙台から本吉までは開通した。

三陸沿岸道路は仙台から八戸まで359kmを結ぶ自動車道路だが、令和元年12月22日時点ですでに261kmが供用中で、98kmが工事（建設）中となっている。宮古以北の完成までにはまだ数年かかりそうだが、釜石宮古間は今年中には開通しそうである。



震災復興祈念公園 祈りの丘 2020.2.7



祈りの丘から防災庁舎、八幡川、さんさん商店街を望む  
2020.2.7

気仙沼から釜石までの間の未開通区間である気仙沼中央IC・(仮称)気仙沼港IC間2kmが、2019年度末に開通予定であり、(仮称)気仙沼港IC・(仮称)唐桑南IC間7kmも2020(R2)年度末開通予定であり、気仙沼中央より南で唯一残っている小泉海岸IC・本吉津谷IC間2kmも2020年内開通予定ということで、工事が進んでいる。

仙台、塩釜、石巻、志津川、気仙沼、大船渡、釜石、宮古、久慈、八戸といった港をつなぐ自動車道路である。旧来の国道45号線を使ったところと比較すれば、その時間短縮やそれにとまなう経済効果やコミュニケーション密度の上昇効果は容易に想像できる。三陸沿岸道と東北道を横につなぐ復興支援道路(2019年に完成した花巻・釜石自動車道路のほか、現在建設中の盛岡・宮古自動車道路)、登米・築館間の宮城県北幹線道路が完成すれば、内陸の4号線・東北自動車道・東北新幹線との接続が容易になり、物資の輸送や人の移動の利便性は格段に向上する。さらに青森、秋田、山形方面の内陸都市や日本海沿岸の都市との連絡の便も著しく向上することになる。平常時のみならず震災等非常時における補完・代替ネットワークとしての有効性が大いに評価されかつ期待されるべきである。そもそもこれら復興支援道路は横の連絡ルートが弱いという旧来からの日本の交通システムの弱点が露呈した震災直後の苦い経験にもとづいて企画立案されたものである。

震災後9年を経て、JR常磐線が全線開通し、東北自動車道と常磐自動車道そして釜石以南の三陸沿岸自動車道がほぼ出来上がり、鉄道、高速道路ともに、内陸と沿岸を並行して走るようになった。残念

ながら秋田、山形にはこうした南北のネットワークもまだ出来上がっていない。これらの地域の内陸と日本海沿岸の南北の高速道路ネットワークの完成が待たれるとともに、それらを横に日本海と太平洋をつなぐ東西の高速ネットワークが早期にできることが期待される。これらの高速交通ネットワークの効果として考えられることは、それを媒介にして、これまでどちらかという互いに孤立していたともいえる東北各地の産業・文化・経済のさまざまな資源が、互いに結びついて、東北各地の人々が、みずから豊かな東北を描き、かつ生み出していくことが夢ではなく現実になっていくということである。顧みれば実はそうしたネットワークの原型はすでに江戸時代以前から旧街道ネットワークとして存在していた。旧街道ネットワークを通じて歴史が作られてきたともいえる。縦のみならず横のネットワークが縦横に結ばれて、各地の地域産業・地域生活・地域文化が形成され、かつ交流が図られてきた。そのことの文化的歴史的意味をいま一度思い出し、今後に生かすことである。

三陸沿岸道路の平均IC間隔は、4.6Kmと短く利便性が高くなるように設定されている。IC周辺の復興まちづくり事業が進展している。復興まちづくり事業は、9割以上がICから約10分以内に整備され、高速道路による「コンパクト+ネットワーク」が実現し、人口減少下で重要な都市間の連携や人口集積に大きく寄与していると評価されている。たしかに、例えば岩手県の陸前高田市では、IC周辺に市役所、消防署、警察署など市の中核施設やコミュニティホール、岩手県内最大規模の災害公営住宅(栃ヶ沢アパート)を陸前高田ICに隣接した高田西地区へ集約する計画とした。震災前と比べると新しい町の中心が東から西の山側に大きく移動したことになる。平地の東部の浸水地域から高速道路IC寄りの西部の高台への移動である。また宮城県の南三陸町では、防災移転促進事業に伴い高台東地区に役場、病院が置かれ、近くを走る国道45号線を挟んで南三陸海岸ICが開設された。また45号線を南に数分下ると45号線をはさんで左側にショッピングセンター、

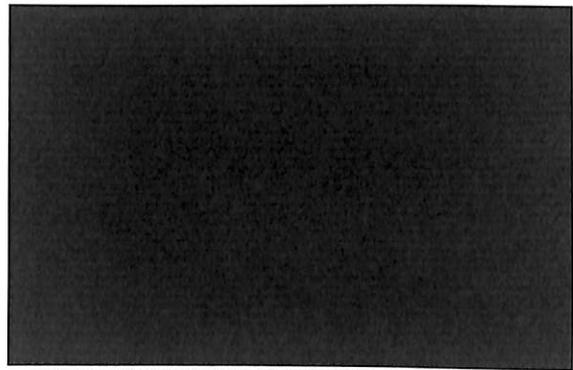
右側に消防署、(一、二年後にはそばに警察署ができる予定のようだ)、生涯学習センター(志津川公民館と図書館)、坂を上ると中央団地が広がっている。東地区の天王山から消防所前の45号線に直線的に接続する道路ができたので、中心がさんさん商店街から生涯学習センター・消防署のあるエリア付近に移動したようにも見える。さらに南下し国道398号線と交わる付近にさんさん商店街や復興祈念公園が配置されている。東へ降りるとすぐ志津川港があり、398号線を西に数分進んでいくと津波浸水地域

の西端にあたる付近に南三陸ICがある。新しい町の諸施設の配置を見てみると、住宅や公共施設は高台に、産業施設は低地に配置し、その間を国道と自動車道路を中軸とする交通ネットワークが高台寄りに移設されていることが分かる。学校だけはすでに震災以前から高台に移っていたが、防災移転のための高台はそれらの学校の近くの山林を切り拓いて造成された。西地区や中央地区がそうである。また東地区はすでに住宅および商工業地区として以前から開発が進められていた地域であった。

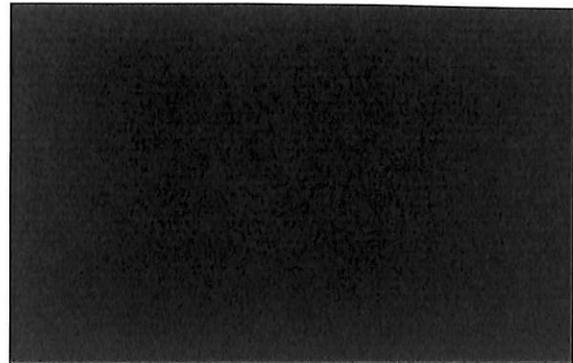
## 1. 最近の漁業環境

第一次産業は自然の恵みを戴いて成り立っている業種であるだけに、風水害や日照り日照不足など気象の変動に直接影響を受け、ときに人力では如何ともしがたい困難に遭遇する。しかし危機が好機に転ずるときもある。それをとらえるのは、人の力である。戸倉のカキ部会の取り組みの成果である「戸倉っ子かき」に対する高い評価はその一例である。しかし温暖化による海水温の上昇に伴うと思われる新しい困難も顕在化してきている。漁業協同組合(宮城県漁連)で南三陸支所長 戸倉出張所支所長に近況をうかがった<sup>1)</sup>。

水揚げ自体は震災前の水準に戻っているとのことである。また防潮堤、道路などのハードウェアの完成はまだ2、3年要する見込みだが、進捗している。問題は、海水温に温暖化の影響が出てきていることだという。かつて採れなかった伊勢エビが採れるようになったり、逆にかつてよく採れた魚が採れなくなったりという変化が出ている。今年はずたまたまワカメがよかった。銀ザケ、秋ザケで年間通してサケを扱えるようになってきている。それでも秋ザケが採れなくなってきている。放流してから4年で帰ってく



宮城県漁業協同組合志津川支所長 阿部富士夫さん  
2019.8.30 戸倉出張所



宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所長 菅原茂さん  
2019.8.30 戸倉出張所

1 8月30日(金)漁協の戸倉出張所出張所長の菅原茂さんと志津川支所長の阿部富士夫さんに近況を尋ねた。2019年JF全漁連主催「第24回全国青年・女性漁業者交流大会」最終日の3月1日全体会でJFみやぎ志津川支所戸倉出張所カキ部会(代表 後藤清弘さん)が資源管理・資源増殖部門で農林水産大臣賞を受賞した。東日本大震災後の再出発にさいしてイカダの数を3分の1に減らしつつ生産量を2倍にするカキ養殖を実現したこと、旧来の分配の方法をいったん白紙にして後継者の有無などで加算するポイント制を導入したことなどが評価されたものである。さらに10月18日には第58回農林水産祭天皇杯(水産部門)の受賞も決定した。震災以来の努力が最高の形で評価された年であった。

るのに、昨年、一昨年あたりから湾に戻ってきてもよいはずなのに帰ってこない。また磯焼けの問題は深刻である。浅瀬の藻場は大丈夫なのだが、深いところは磯焼けをおこしているという。東京海洋大学、東北大学、宮城大学と連携してロボットをつかって調査しているとのことである。磯焼けはウニやツブガイを採取することによって多少は抑制できるかもしれないが、温暖化という地球規模の変動に対してどの程度の効果があるかは未知数だという。

磯焼けが進むと海藻がなくなりアワビの隠れ場がなくなり、アワビはやせ細ってくる。養殖のためにも海藻の復活が課題である。内湾はまだ状態がよいが外洋のほうは状態が悪いということである。もっか海藻の復活が最大の課題のようである。8年を超えたウニは実入りが悪いようだ。若いウニをとって蓄養するのがいいのかもしれないと。

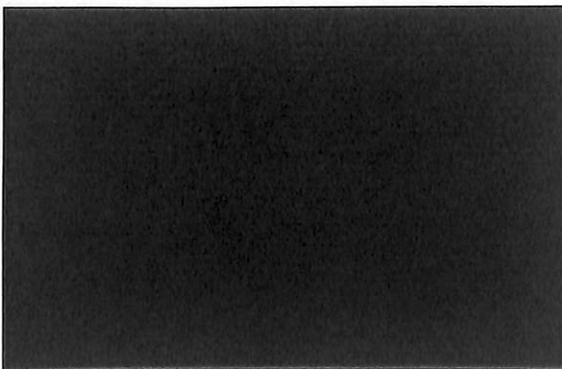
96人で平成24年から27年まで3年間「ガンバル漁

業」をやったことの成果は大きい。まずカキ養殖の成果をあげることができるし、また若い後継者を確保でき、増加している。かれらが頑張れるような仕組みを作っていくことが大事。網や台を3分の1に減らし、そのかわり手間暇をかけ、いいものをつくることを目指した。その結果1年で売れる大きさになった。ムラサキ貝（ムール貝）が台に着くが、これは海水の状態がよくなっていることを示している。ポイント制のシステムを取り入れたが、これが十分にいい形で運用しているかどうか点検をする必要がある。（一人で作業する場合40ポイント、後継者と作業する場合60ポイントとしている）

体験学習に船を提供することも積極的におこなっている。これは小遣い稼ぎになるし、教育効果もある。さらに青年部（戸倉出張所青年研究会）は「食育」という観点から南三陸町の観光協会と協力してどういことができるか研究を始めているという。

## 2. 若手漁業者の挑戦

歌津の若手漁業者の高橋英樹さんにも聞いた。高橋さんは、養殖業の傍ら、漁業試験場とタイアップして、ウニを小規模でも養殖出来る方法の可能性を模索し、陸上で個人でもできる蓄養の技術開発を研究している。ウニは何でも食べるので餌の問題はないという。



高橋英樹さん 歌津寄木の作業場で 2019.9.1

問題なのは環境のほうで、磯焼けは、海水温の変動の問題もさることながら、浅瀬の前浜の管理ができなくなったことに一因があるのではないかと。その理由として各種海藻の開口をしなくなったこと

があげられるという。かつてはフノリ、アラム、ワカメ、テングサなど、毎年収穫していたから、翌年も胞子がついて、毎年新しい若い海藻が成長し、それを収穫するという循環が成立していた。ところがその毎年の海藻の収穫をしなくなってから磯焼けが発生するようになったのではないかとという仮説である。海辺の漁業の変化が磯焼けを発生させるようになった原因のひとつと考えられる。磯の資源は大切だが、そのためには海藻の管理が大事である。

さしあたり海藻をかつての状態に戻すことが課題であるという。漁船漁業にはすぐに影響がでる。藻場は魚にとって外敵から身を守ってくれる逃げ場であり、産卵の場であり、巣である。藻場をいつも新鮮な状態にすべく管理することが重要であり、それをどうやってやるかが問題だと力説する。身の入っていないウニを蓄養することから始めようかと考えているそうだ。まずウニの蓄養をする。そのウニを売って、藻場をつくるための資金とする、という戦略である。実に頼もしい。話の内容は、漁協側の状

況認識とも一致している。うまく行くことを祈るばかりである。

さらにつぎのような漁業の方法に関する問題意識も話してくれた。これまでは3世代で一家の漁業を営むという漁家が多かったが、これから先10年ないし20年のうち、従来のようなかたちでやっていける家もあれば、それが難しくなる世帯も生まれてくる。どうやって歌津の水揚げ量を維持していくのか、深刻な問題だという。今回漁業法が変わり、企業が参入しやすくなったが、協業化、あるいは漁業の六次産業化の可能性を、地元の力を結集してやっていけるか。地元にかに還元するか、こうした問題を真剣に考えなければならない時期に来ている。環境に特化した改善策を考える必要があるという認識である。夏は天然のウニ、冬は養殖のウニを供給できるようになれば、年間を通じてウニを供給できるようになる。まずここで成功事例をつくる必要があるだと思っていて、そのためにいろいろ実験をしている。

### 3. 農業の可能性

この夏ある若い移住者に会った。

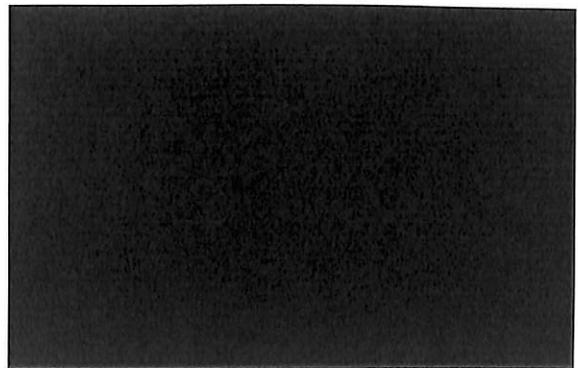
JAしんみやぎ南三陸地区本部営農販売課農業復興担い手サポート班に所属する宮岡茜さんである。宮岡さんは、東京の恵泉女学園高校を卒業した直後2013年春にはじめて南三陸にボランティアで訪れた。東京農業大学に入学し、2014年、大学2年の夏に、高校の卒業生たちとボランティアで再度南三陸を訪れる機会があり、そのときから南三陸に訪問するようになった。就職活動のさい、農業系、土いじり、現場との接触がいいなと思い、またいつのまにか南三陸が第二の故郷というような感じになっていたので、南三陸の農協に応募し、2017年に採用された。内定をとったあと親を説得したという。同期7人（男子4女子3人）のうち移住者は2人で、移住者は増えているという印象があるそうだ。

南三陸は、他人に干渉しすぎなのには最初は閉口したが、今はそれがよさでもあると思っている。南三陸の人々のつながりは濃く、世話好きに見える

たくましさを感じた。地元以外のダイバーを受け入れて、手伝ってもらうことも考えなければならない。いずれにせよ一次産業をもう少し強く、もう少し稼げる一次産業にしていかなければ、面白くないし、漁業の担い手、なり手がなくなると、危機意識も強い。水質、湾内の環境の適正管理が重要なのだが、漁師と漁協が連帯して適正管理に向かわなければ、海に負荷をかけるだけだと心配している。

自分たちでできるだけのことをするよりほかないのだが、問題や失敗した理由を掘り下げて考えていくことをもっとすべきであり、もっと研究熱心になるべきであり、小さいこと一つ一つを大事にすべきであり、若手はお互いに学び合うことが大切だという。これは父親から学んだことのように。「父親の研究熱心、仕事の丁寧さときれいさは、自分にはいまなおハードルが高い。でもはやく学び尽くしたい」という言葉が印象的であった。

いう。東京の人間関係の淡白さに慣れた目から見た印象であろう。



宮岡茜さん 志津川廻館の新みやぎ農業協同組合  
南三陸地区本部 2019.9.1

農協職員としての立場から最近の南三陸の農業事情を説明してもらった。

専業農業人口は減っているが、農家一戸あたりの生産量は増えており、一営農家の経営面積も、販売量も増大しているという。震災後の傾向として集約化と大規模化が進んでおり、大規模化機械化ができ

るようになり、土地を借りての農地中間管理事業がすすんでいるという。10工区を大規模集積して営農組合を作って飼料用米を出荷用として栽培している。

栽培品目についていえば、園芸は震災前の倍以上になっており、トマトとネギ、菊、イチゴがうまくいっている。イチゴは「気仙沼イチゴ」として地域内で販売しており、「気仙沼茶豆」も栽培しているという。戸倉の小松菜も良く、ネギも軌道にのっているということである。

移住者がグリーンファーマーズをやっているが、食も観光も人と人とのつながりがあったはじめて生きたものになる。四季の旬を感じられる食べ物を供給することが目標だという。いろいろ観察したり聞いたりして思うことは、農業は、担い手不足という問題があるが、継承したいと思えるような営農方法を確立することが大事なのではないかと前向きに課題を捉えている。

最近では農業大学校卒業の地元出身者が営農に新規参入したという明るい話題もあるようだ。

気仙沼の階上（はしかみ）では20代2人、30代2人、50代1人、60代1人のグループが、イチゴの高設栽培を行っているという。若い世代が農業の分野でもしっかり継承者の役割を引き受けつつあることを知って、少し見通しが明るくなった。

しかし若者とくに若い女性の立場から見て、南三陸には、足りない点がある。やはり病院の診療科目の充実度であり、産婦人科、小児科、皮膚科は曜日時間が限定されているので、いつでも必要なときに見てもらえるわけではないので、緊急時の不安は払拭できないようだ。気仙沼、石巻、登米にはしっかりした病院があり、必要な場合にはそちらに行くこともできるからとりあえず良いのではと思うのだが、やはりそうはいかないようだ。

移住した最初の頃は友達がいなくて、寂しかったが、友達ができるようになってからここが自分の居場所と思えるようになってきたという。南三陸は人が魅力であるとも。友人知人に恵まれているようだ。

移住者は増えているが、南三陸には、「アパートに住む」という概念がないように見えるという面白

い指摘をしている。目下のところ、公営住宅が余っているので、一般開放しているが、移住者を呼ぶといいながら、南三陸には移住者が住む家がない。アパート代5万円は高い。地元のほとんどの人にとっては住まいは、自明のことで、自分で家賃を払って住むという発想がないので、移住者にとっての「住まい」の問題に気づかないのではないかと指摘は重要である。

仕事以外の活動を聞いたところ、「復興青年会」を手伝っているということだが、移住者の半分くらい、20人ほどが、復興青年会に参加しているという。

歌津のほうは30人ほどの会員からなる「海職人」という青年会がある。40歳で終わり、越えると顧問になる。「海職人」はハマーレのイベントに携わっているという。こちらにも顔を出しているようだ。

若者にとって学校、仕事場と家以外に集える場所がないのがさみしい。高校を出たあと、結婚するまでの間の期間が空白であり。若者が町に魅力を感じるできない理由のひとつではないかという。親になればまた子どもを通じてつながりはできるのだがという。

とすれば、若者たちが、そこで自分たちでネットワークを立ち上げて生活環境を整えることをやっていったらどうだろうか。おなじような思いでいる人が何人もいるのであれば、互いの力を結びつけば、相当のことができるのではないだろうか。見かけの不便を快適に換える手掛りは自分たちの考え次第ということになりそうだ。実のところインターネット時代に入ってから、距離による情報の格差はなくなったといえる。それどころか暮らしやすい地方から情報を発信するという新しいトレンドが生まれようとしている。

結局、地方で大して不便を感じることなく生活するためには、近所に信頼できる友人知人をもち、お互い助け合うことが必要だということのように見える。都会でよりも地方でのほうが助け合いの絆は容易につくっていけるだろう。地元の人間の場合は、昔からの地縁、血縁がそれを支えている。なにかあってもその縁がそのままネットワークになる。不便

さはこのネットワークの力で解消できる。これは都会には無い絆である。都会はさまざまな施設に恵まれているようだが、そこへのアクセスはかならずしも便利であるわけではない。都会のコミュニティの

人的なネットワークは地方のそれに比べてはるかに貧弱である。孤独を余儀なくされている人は圧倒的に都会に生きている人々である。

#### 4. 南三陸の将来—郷土史から考える

すべてが波にさらわれたあと、絶望のなかからここまでよく復旧復興してきたものだという思いはある。役場の努力もその点では評価すべきだろう。だが不満がないわけではない。「何のために」という復興の哲学が欠けている。すべてが新しくなったが、南三陸町という新しい故郷をどのように再生させていくのか、どんな町をつくるのかという、ビジョンが感じられない。だから莫大な補助金によって、立派な施設がたくさん出来たとしても、なにかよそよそしく感じられるのである。ではどうすればいいのか、無からはなにもつukれない。歴史から学ぶ町づくりしかないはず。過去から学び未来を構想する。それによって過去と未来をつなぐのだ。どういう哲学で新しい町をつくっていくのかということ、自分たちの歴史的資源をつかって考えていくことだ。こう熱く語るのは、歌津地区復興支援の会一燈代表の小野寺寛さん。



小野寺寛さん 2019.9.2

古代以来この地はけっして何もない辺境ではなかった。相応の文化があり、産業があった。磐井、本吉、金成、花泉の砂金や金山、その富によって生まれた平泉東稻山文化と南三陸歌津の田東山仏教文化は平泉藤原政権と奥州砂金によって結びついている。北上国見山仏教文化はそれよりも200年前から栄え

ていた。平泉に移る前の藤原基衡は、奥六郡を支配する陸奥守として江刺郡の豊田館を30年間居城としていた。基衡は国見山文化を平泉のモデルとしたのかもしれない。金山は本吉大谷金山を中心に津谷、赤岩、馬籠、入谷にまで田東山周辺に広がっている。一関には長坂はじめ多くの金山跡があるが、気仙地方にも気仙沼鹿折金山、陸前高田玉山金山や竹駒金山、大船渡の今出山金山、大槌金沢金山にいたるまで昭和まで操業していた金山が少なからずある。平泉文化と金の関係を現代に伝える痕跡といえるだろう。

こういうことを調べ学ぶために「南三陸の中世を学ぶ」研究会を20人ほどで行っている。

また小野寺さんはもう十数年来中学校の一年生の総合学習で毎年3回郷土の自然と人と歴史の出前授業をしているという。自分たちが生まれ育ったところがどういう来歴をもったところなのかを教え、どこへ行っても誇れる郷土であることを伝えることが、自分たちの使命であるという。そのことが10年後、20年後、この地域を背負う人たちの心の支えになればよいと。まことに貴重な社会文化活動である。これが本当の生涯教育あるいは社会教育というものだろう。

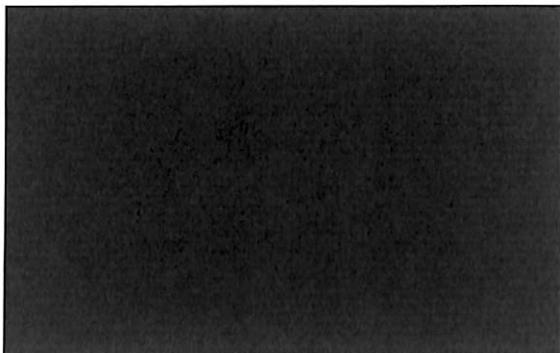
公民館は住民と一緒に自分たちの生活課題を検討していくことが大切であるという。地域ごとの文化もネットワークも異なるのだから、それをつぶすのではなく、育てることで、独自の個性をもった文化がはぐくまれる。公民館は、地域の生活課題を解決するための活動の場でなければならない。その意味で公民館の側から震災復興を掲げたプロジェクトを立てるべきだし、それはそれぞれの地域ごとに、地域の人が取り組んでいくべきことがらである。

小野寺さんは平成18年に退職したが、そのころ教育  
長をしていた佐藤正助（大正12年生まれ）さんから

学んだ教えだという<sup>2</sup>。

## 5. 震災から9年目の役場

2019年9月2日（第15回調査）に役場で、教育総  
務課長の阿部俊光さん<sup>3</sup>に役場の業務の近況を聞いた。



阿部俊光さん 2019.9.2

「消防署は今日（2019年9月2日）営業を開始し、警察は令和3年4月営業開始の予定」だという。「応援部隊は現在40人だが、本来2020年度末0人の予定だった。海岸の防潮堤関係が遅れており、土木建築関係の応援部隊はなお必要であり、福祉、教育学校部門でも少人数ながらお願いしている」とのことだ。2019年の春にオープンした生涯学習センターについて尋ねた。「もともと学校、公民館、保育所が点在している町であった。（もともと入谷村、戸倉村、志津川町が1955（昭和30）年に合併して志津川町になり、さらに2005（平成17）年に歌津町と合併して南三陸町となったということを含意している）。生涯学習センター（志津川公民館と志津川図書館からなる）は（すぐ裏山には志津川小学校があり）文教ゾーンという位置づけのなかに作られている」。「社会教育がコミュニティ再生の鍵」だと思っていると、その役割の大きさを強調しつつ、「住民に使ってもらえる公民館、図書館であってほしい

し、町の職員一人一人がしっかりとした気構えをもつことが大事でないかと思っている」と行政の役割と責任を強く意識している様子であった。と同時に「図書館運営協議会は5～6名から構成されているが、協議会に説明しながら運営を進め始めたばかりだが、行政コストを抑えてやっていくというためにも、徐々に住民の皆さんの参加も得て運営していけるようになれば」と「住民参加」の運営の可能性を期待してもいた。生涯学習センターは今後各公民館を結ぶハブの役割ももつことになるだろう。

「インフラが整って、器ができたとはいえ、人々の日々の当たり前の生活が営まれてはじめて街が生きているといえるだろう。そのために必要なものは何か、街として何が足りないか、考えないといけない」。「BRTでさんさん商店街、高台住宅団地、スーパー、役場・病院をつながるようラインがようやくできた。さらに密なネットワークを構築していければと思う」。町は「俯瞰的なビジョン、展望を町が提示する必要があるが」、なかなか手が回らないという現実もある。「集中復興期間があと一年半で終わるが、それまでには、ビジョンを示さなければいけないし、町民からの支援をお願いするためにもそれは必要なことだ。あと一年半しかないのかという気分と、あと一年半で終わらせるぞという気分がある。現場によって気分は異なる。復興庁存続が決まったことでなんとなく緊張感がすこし緩んだような気分がしなくもない。あと17、8年は復興特別税（所得税）を払い続けるのだから、そのことを忘れてはいけないだろう」と、行政の責任の大きさを自戒するように話してくれた。新しくなった施設に関

2 佐藤正助（1924-2018）1974（昭和49）年3月から1986（昭和61）年10月まで志津川町教育長として「地域公民館」（「地域復興センター」）づくり、歴史に学びながら地域をつくっていく活動をした。1981（昭和56）年「志津川町誌編纂に関する事務」事務局長。著書に『葛西四百年』（1979年）、『志津川物語』（NSK出版、1985年）、『阿豆流為・母禮の実像とその時代』（耕風社、1997年）、『目で見える気仙沼・本吉 登米の100年』（郷土出版社、2000年）葛西氏研究の第一人者。

3 阿部俊光さんを最初に訪ねたのは、第3回調査のとき（2013年8月）で、阿部さんは当時復興企画課の課長だった。

しては「原価償却、更新ということを念頭に、維持していかなければならないし、公共施設は利益を生むわけではないので、公共サービスという形で返していかなければならない」と、まずは最大限有効に活用し続けることの必要を語った。その努力のなかから維持管理のための新たな財源の可能性が見えてくるであろうと前向きに捉えていたのが印象的であった。流出人口対策についても傾聴することができた。

登米、石巻、気仙沼に働きに通っている人もたくさんいる、そういう人たちにとっても暮らしやすいいい町だと思ってもらえるような努力をする必要がある。例えばそういう人たちに通勤費を補助するとかの工夫はありうることだと思う。30年度から給食費も相当助成している。震災直後からずっと人手不足が続いている。でもそれは水産業と土木建築に限られる。こうした問題を解決するためにも、民間でもできること、地域でもできることを町内町民と協働していく仕組みをつくるが必要になってくるだろうと、南三陸に住みつつ、周辺地域への通勤通学という生活圏構想を目指した議論が進んでいるようだ。これは従来の「閉じた生活圏」のなかでどうしようという閉じた発想から飛び出して、一周り、二周り抜けて生活圏を考える発想に移り始めていることを感じさせる話である。

第16回調査（2020年2月6日）では、会計管理者の三浦清隆さん<sup>4</sup>に話を聞いた。当時今の姿を想像できたか、また今後の課題はなにか、自分にとって南三陸がどんな町であってほしいか尋ねた。

震災直後は、先の見通しはまだ見えず、直近のやるべきことは山のようにあり、といった状態で、仮設の役場の中も、戦場のような雰囲気だった。当時は、どういう青写真をつくり、どのように実施していくかという時期であった。思案と重圧の日々であった。それに比べると現在の役場は新しい庁舎での平常であり、まったく別世界である。仮設の旧庁舎は、現在も土木建設関係の部署として、なお前線基



三浦清隆さん

地の野営の雰囲気が残っているが、順次集約していく予定ということである。

「振り返ると、ここまで来られたのはひとえに全国自治体からの優秀な応援部隊の助けがあったからであり、いくら感謝しても足りない」という言葉は前線の指揮官としての実感であろう。その言葉には同時に震災で失った多数の有能な若い職員を悼む気持ちを感じられた。彼らの無念を胸に秘めて震災後の町の行政を担ってきた思いがあふれていた。

現在会計管理者の立場にあるからだろうが、公営住宅の15年後、20年後の大改修の財源の見通しを早くから考える必要を説いている点は、当たり前といえば当たり前であるが、今後の諸施設の運転と維持のコスト計算について今の段階ですでに視野に入っているのは、頼もしい限りである。こうした問題意識や設計思想が若い世代にきちんと受け継がれることが切に望まれる。

最後に自分にとってどんな町であってほしいかと問うたところ、面白い答えが返ってきた。

「老いても子どもの世話にならず、自分のことは自分で整え、済ませることができる、そういう町であればよい。高齢者が「健康」で「元気」な町だ」という。「コミュニティがしっかりしているところは集団検診の率が高い」。健康と相互扶助によって、健康寿命をのばすことが、少子高齢化に対抗できる第一の条件である。そのような町はまちがいなく生活しやすい町であり、若い人にとっても魅力的な町ということになる。若い人を迎え入れるための必要

4 三浦清隆さんを最初に訪ねたのは、第2回調査（2012年2月）、第3回調査（2013年8月）のときで、三浦さんは当時復興企画課の課長だった。

条件である。コミュニティの世代の循環的継承を可能にさせる条件ということになる。南三陸の持続可

能性にとって「健康」な「高齢者」がキーワードになった<sup>5</sup>。

## 6. 生涯学習センターの役割—志津川公民館長兼図書館長佐々木仁一さんに聞く

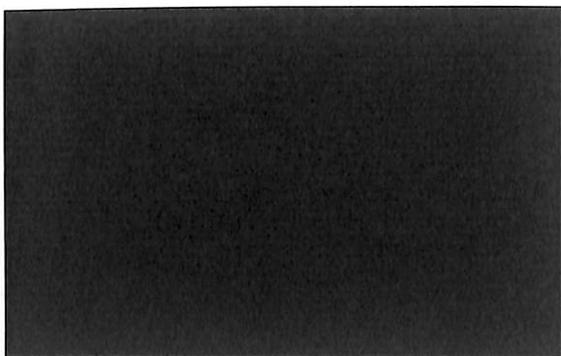
インフラ関係の再建はほぼ計画どおり実施され、公共施設などは、今後の町のサイズや施設維持の財源を考えると、りっぱすぎるのではないかという声も聞こえてくるほどである。2019年4月にオープンした南三陸町生涯学習センター（南三陸町図書館志津川公民館）に対する評価もなかなか厳しい。しかし少なくともこれから60年は使い続けるだろう。うまく使えば100年くらいは持つ。そうなれば、役場も病院も生涯教育センターも歴史的建造物として保存されることになるかもしれない。震災前の財政状態ではとても望めないようなものばかりである。丁寧に有意義に使ってこそその恩返しだろう。維持費の大きさを嘆くのではなく、知恵をしぼって不要な人件費を抑えることである。人を減らすことではなく、無駄な時間と費用と仕事を減らすことである。町民が非常勤でできる仕事も多々あるはずだ。

常勤職員はもちろん必要だが、非常勤職員で十分

に間に合う仕事もたくさんあるはず。その仕分けを町民自身が行うことだ。公共体を維持するのは、町民自身であること、自分たちが維持するのだという自覚と気概をもつべきである。そういう気分が自然と生まれるような町であってほしい。そのためにはまず町議会がその方向を示すべきであろう。そういうなかで町民も、議会も、役場も、持続可能な町を維持していく術を身に付けていくのだと思う。よその土地の人が住みたいと思うような町とは、移住してきたいと思う土地とは、まず地元の人々がその町を愛し、そこに生まれ育ち、そこに暮らしていることを誇りに思っているような町であろう。そのような町にする努力を世代を重ねて行っていくうちにしだいにわが町わがふるさとに対する思いが日々の生活のなかに生まれてくるのだと思う。そしてそれこそが後世に伝えられるべき文化であり、歴史というものである。

入谷公民館は、旧入谷中学校跡地に建設中で、2020年度中にオープンの手配とのことである。公民館が立地する行政区には集会所を置かず、公民館が行政区の集会所と避難所の機能を兼ねることができるよう設計するということである。公民館が地区の生涯教育・社会教育・地域活動や文化活動の拠点である。

新しい南三陸町生涯学習センターは各地区融合のコミュニティ活動の中心である。コミュニティネッ



佐々木仁一さん 2019.9.3

5 南三陸でもとりわけ中山間地にある入谷地区ではバス停から遠いところに住まう高齢者にとって足の便の確保は切実な問題であった。2019年9月に菅原辰雄町議会議員からそういう需要に応える仕組みを作っていくことが検討されているということを知った。地域で送迎システムを自前で作っていくことのようなのだ。役場の企画課と連携して「林際カーシェアリング会」を立ち上げるための設立準備を進めているということであった。車をもっていない高齢者や独居者が公共施設や病院や買い物に行くための足を確保することを、できることからやってみるということである。石巻で震災後始めたカーシェアリングを参考に、入谷で9月から10月末まで走らせ実証実験をした後、住民18人が登録する組織「林際カーシェア会」が発足した。会員登録した住民は、旧林際小学校（現校舎の宿さんさん館）校庭に置かれた5人乗り乗用車一台を運転することができるし、ボランティア運転手に頼んで外出支援もできるようになった。入会金や年会費などは不要だが1km走行ごとに100円程度を会に預け利用でき、燃料代や経費を除いた分は返金されるという。シェアする車両は「一般社団法人日本カーシェアリング協会」から無償貸与されており、自賠責保険も掛けられているという。山間部の高齢者にとっては、すこぶる好評のようだ。高齢者を元気にさせるいいアイデアである。高齢者が元気な町への一歩である。



南三陸町生涯学習センター

トワークのジョイントの役割をするのが生涯学習センターの役割だと思う。人々の生活が生き生きとしたものになるためのバネの役割を果たせればと考えているが、中央公民館として、行政と町民の間に立って、歌津、志津川、戸倉、入谷の4公民館をまとめる立場にある。公民館、協議会、子供会、ジュニアリーダーなどのサポーターと協力して、やっていかなければならないところだが、人手が足りない。

「行きづらいところ」ではなく、「行きやすいところ」にしていかなければならない。だれのための図書館、公民館かといったら、町民一人一人にとって

くつろげる場所でなければならないし、いわば町民一人ひとりにとっての「マイ書齋」であればいい。バンドや合唱など音楽サークルの練習の場ができた。予約状況や催しの時間割やカレンダーを表示し、利用の仕方を紹介する。茶道、華道などさまざまのお稽古や勉強会など積極的につかってもらいたい。

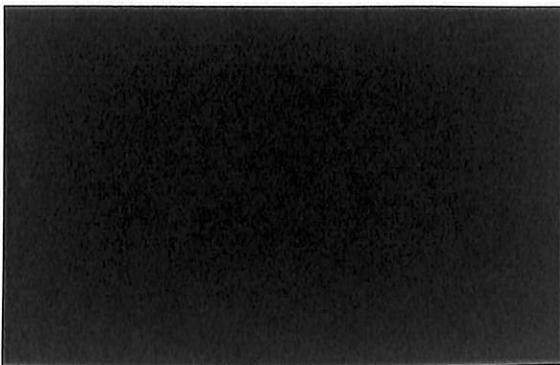
町内の中央図書館的な役割をもち、移動図書館は小学校、復興住宅の集会所それぞれに月一回行くサイクルで動いている。

運営方法については指定管理制度の導入の可能性も議論になったが、地域との寸断の可能性もあり、結局ノウハウを町内で調達蓄積し充実させていく方向性を重視した。地域生活とつながっている公民館という公民館が戦後担ってきた役割の大きさ、歴史的意味を佐々木さんは強く意識しているようだ。「公民館活動は自分の天職だと思っている。自分の役割は、人々を笑顔にすること、元気になってもらうことだ。地域と一体となって、地域を見ながら仕事をしたい」と結んだ。

## 7. 社会福祉協議会「結の里」再訪

前回紹介した結の里の活動のその後を知りたくて、2020年2月6日、結の里を再び訪ねた。引き込こもりの問題は公営住宅だけでなく、高台の新しい団地でもやはりあるのではないかと気になったからである。今回も社会福祉士で南三陸町社会福祉協議会地域福祉係長の高橋吏佳さんから聞いた。

課題はあるが、限られた人員で最大限効率的に見



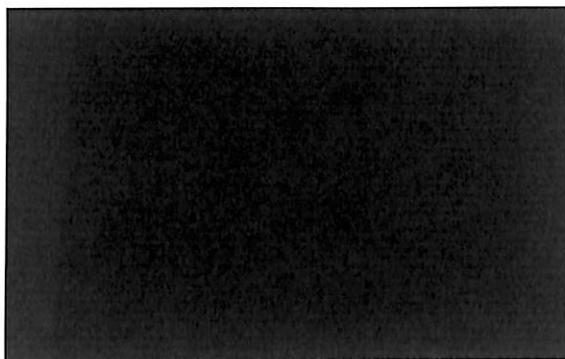
高橋吏佳さん

守り訪問活動を行い、また結の里へ気軽に出かけて来れるような企画をいろいろ考えているとのことである。利用者は近所だけでなく町内各地域からやってくる。遠くの方は連れ立ってくる。「みんなで交流、多世代交流」をにかけているが、高齢者だけでなく赤ちゃん連れのママたちや小学生たちもやってくる。「結の里」という言葉が子どもたちにも浸透しており、子どもたちの集まる場所にもなっている。イベントのときだけでなく、いつでもだれでも立ち寄れる「えんがわカフェ」があり、また月一度の地域食堂「みんなの食堂」も盛況で、「みんなの居場所、ささえあいの拠点」になりつつある。結の里の事業と活動はオープンから2年になるが全国的にも評判になり、視察が絶えないということだ。問題はやはり人件費で、補助が出ている間は大丈夫だが、そのあとも継続してやっていけるように努力したい

と語る。

## 8. 伊里前の近況

島山幸男さん<sup>6</sup>に聞いた。「伊里前は本道路の工事がまだ出来上がっていないのでイメージができないが、来年出来上がれば、くつろげる場所になり、眺めも良くなるだろう。直売所のようなものができればよいと思うが、どうだか。季節の祭りや催しには人は集まる。



島山幸男さん 2019.9.2

しかしやはり震災、復興後、なんとなく、気分が変わったという感じがする」。ちょっと疲れがでてきたかなということだろうか。「いま防潮堤をつくるのでまだ仕事があるが、出来上がったら仕事もなくなるし、どうなるか不安を感じる。三陸道ができ

たが、国道45号線沿いのガソリンスタンドの経営が難しくなってきた」。大きな変化の前に戸惑いをかくせないようだ。農産物の直売と漁協主催の直売をハマレの広場で定期的にやれば人が集まるだろうし、地元もにぎわうきっかけになるのではないのでしょうかと訊ねると、「歌津は何かやろうとしても鵜の目鷹の目で見えるような気風がある」という。つまりあたらしいことや思い切ったことにはなかなか踏み出せないということのようだ。「歌津の公民館は、いろいろな打ち合わせなどに使っているが、生涯学習センターができたので、そちらのほうが便利かなという感じがする」そうだ。両方を便利に使えばよいのではないか。

役場が震災以前に比べて「なんとなく敷居が高くなったような感じがする」という。これは庁舎が新しくなってから、あちこちで聞く。庁舎が新しくなって、お互いがぎこちなくなっているようだ。町民も、役場の職員も、もうすこし平らに向き合うようにすればよいのかもしれない。

## むすびにかえて

戸倉の林地区の山の上に「海のみえる森」という志津川湾を一望出来る場所がある。そこにミャンマーの篤志家から震災の鎮魂と復興を祈念して大理石の大仏が寄贈されたという話を聞いたので、「海のみえる森」の整備に関わっている後藤一磨さんに案内をお願いして、行ってみた。ほんとうに眺めのよいところである。将来は春には桜の名所になるそうだ。場所はホテル観洋の私有地の中ということである。そういう意味では歌津の観音像がやはり牧野前歌津町長の私有地につくられたのとある意味で似たような面がある。どちらも、一般の人が自由に気軽

にウォーキングがてらお参りにいけるような場所になってほしい。志津川の復興祈念公園も一部開園した。あと一年ほどで完成するであろう。戸倉の公民館のそばにも慰霊のための祈念の施設が計画されているという。戸倉の西戸地区の復興祈念公園とともに、南三陸町の祈りの場所が地区ごとに揃うことになる。これらの施設はなによりも地元住民の祈りと記憶の場であるべきだが、町内外からの来訪者にもアクセスしやすい場所であってほしい。そして南三陸の風光明媚と調和する祈念の場にふさわしくあってほしい。

6 2019年9月2日、伊里前ハマレで聞く。



寄贈された大理石の大仏



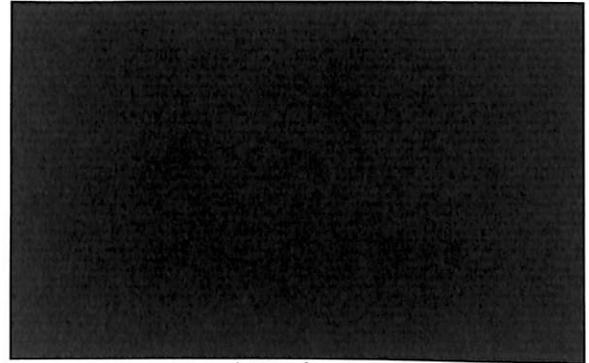
「海のみえる森」から志津川湾を望む

## 付録：歴史に刻まれ、今に生きる「共助」 一大船渡市日頃市町長安寺

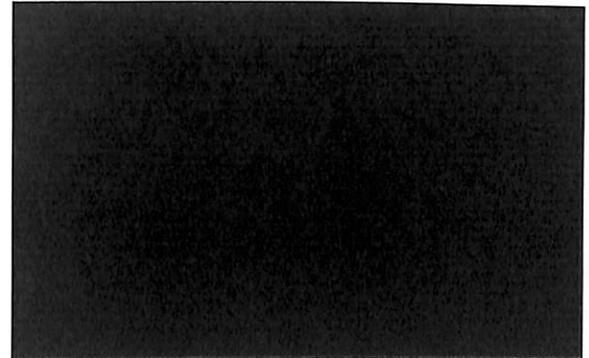
一昨年から大船渡日頃市町長安寺を訪ねるようになった。伊達藩制時代からつづく契約講の名残が岩手県三陸沿岸南部の気仙地方にも残っているのではないかという見当があったからである。大船渡市日頃市町長安寺地区には直接的なかたちで契約会とか契約講といえるものはなかったが、何人かの方に話を伺っているうちに、契約会の精神に通ずる地域共同体の伝来の精神とでもいえるようなものがこの地域の組織や活動のなかに色濃く残っていることに気づかされた。そういう意味では当初の見当は間違っ  
てはいなかった。

今回は8月31日に長安寺を訪問し、山下一成さん宅で長安寺太鼓保存会・チンドン寺町一座の面々にお集まりいただいて活動の来歴を伺った。出席者は寺町一座の座長菊乃屋鈴丸こと鈴木正利さん、山下哲夫さん、杉山孝好さん、佐藤忠清さん。

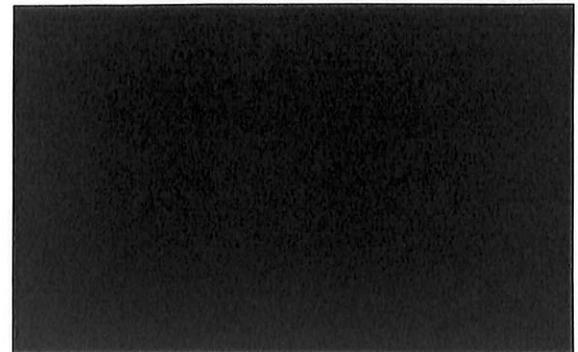
日頃市の各地域には古くから伝統芸能が伝承されてきており、それらは五葉山神社の4年ごとの祭礼である五年祭で奉納披露される（獅子舞<権現様>11種、剣舞4種、鹿踊り2種、鷹生八木節、鷹生お神楽（法印神楽）、虎舞、そして長安寺太鼓の21種が現在伝承されている）。実は長安寺地区には他の地区のような伝統芸能がなかったため、なにか継承できるものを作って残そうと考えたのが1970年のことだという。長安寺には古くから時を告げる太鼓堂と鐘楼堂があったので、それに縁のあるものがよからうと考え、梶の木で太鼓を自分たちで作成し、東京の助六太鼓に入門し、技を習得し、長安寺太鼓保存



山下一成さん



山下哲夫さん 鈴木正利さん 杉山孝好さん



佐藤忠清さん

会を発足させ、1972年五葉山神社で奉納とお披露目をした。長安寺での8月14日のお盛（盆踊り）、盛川権現堂での灯籠流し、4年ごとの五葉神社の5年祭での奉納が年中行事になった。太鼓の練習場も手作りで作った。その後2002年、長安寺太鼓は若手に譲り、チンドンをやろうかと考え始め、富山のチンドンコンクールを見学に行くようになったのがきっかけとなり、そこで菊乃屋メ丸親方と知り合いになり指導を受けることになったのが始まり。平成15年「チンドン寺町一座」を旗揚げした。富山のチンドンコンクールは富山市が町おこしのために1955年から始まり2020年4月で66回目となるという。毎年4月初めに桜の名所富山城址公園で、プロの部とアマチュアの部にわけて、3日間にわたって開催されるコンクールである。50代半ばから始めてもう20年になる。ゼロから始めたが、いまはやればなんとかなるものだなという思いだ。「いつかは大船渡でチンドン大会を開催」と思った矢先にあの震災（3.11）だった。震災直後、大船渡の観光大使の「大船渡つばき娘」の3人が長安寺まで来て、「碁石観光まつり」に参加しませんかと誘われ、こんな大変な時期に「チンドンか」と躊躇したが、試しに出てみたところ、大歓迎され、逆にエールをもらうほどだった。その後は週末ごとに沿岸の被災地を慰問した。2013年から「復興・大船渡全国ちんどんまつり」を開催し、2019年7月14日、最終回（第7回）を迎えた。復興が一区切りついたということと、メンバーの高齢化とコスト面の負担増が主な要因である。いまでも週末は興行の依頼でいっぱいだそうだ。

チンドン寺町一座は、長安寺太鼓保存会のなかの部会の一つであり、メンバーは同時に長安寺地区公民館の構成員であるという。公民館は行政上は行政区を単位としているが、住民にとっては公民館が日々の生活の基盤のようだ。それほどに住民の公民館を介した絆が強い。さまざまな共同のことが公民館を基礎に組織されている。各世帯は運営会費にあたる公民館会費を月1300円払う。それでさまざまな地域活動を賄うということである。たとえば防犯協会、消防協力会、体育協会などへの参加費は公民館

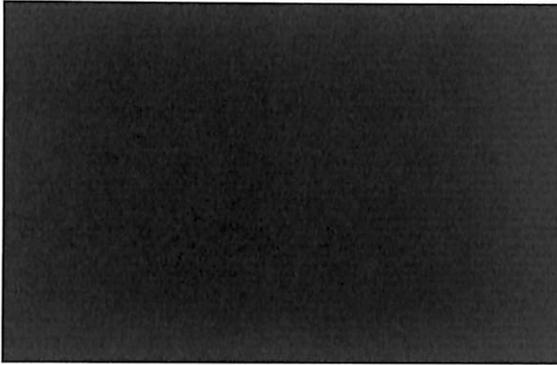
会費からまとめて支払われる仕組みになっている。共同募金などは各世帯ごとで支出し、公民館からも若干補填するようだ。

地域生活が地区公民館という集合体として営まれているとあってよい。裏を返せば公民館に地域のあらゆる情報があつまり、そこでさまざまな意思決定がなされているとあってよい。日頃市町は昔から五つの地区から成り立っている。「甲子・鷹生」「平山・小通」「長安寺・板用・川内」「宿・関谷・坂本沢・大森」「田代・長岩・石橋」の5地区である。この5地区は共助の基礎単位になっており、かつてはそれぞれ凶作や飢饉に備えて地区（ムラ＝部落）共有の「郷蔵」を持っていた。いまでも、「郷蔵」地区が緊急時の声掛けの最小単位になっているようだ。長安寺地区にとっては板用地区と川内地区が同じ一つの兄弟部落ということになる。緊急の場合に最初に声掛けする単位である。

昔からの歴史的な深いつながりが今も生きることが感じられる。先の震災のときには、直後から長安寺の公民館に、発電機、精米機、玄米をもちより、ガソリン、灯油を調達し、いちはやく炊き出しの準備を始め、3日後には日頃市町内の公民館や消防協力会が支援組織を結成し、六班編成で、交代で3月27日まで炊き出しをおこなったという。

興味深いのは、チンドン寺町一座と長安寺太鼓保存会のメンバーが実は公民館長の経験者でもあり、地域の人的ネットワークの結び目になっていることである。年に5、6回の草取りや、さくらなどの苗木の植樹などの地域環境の美化や街灯の設置や保守などを日々行っている。老人クラブの旅行を組





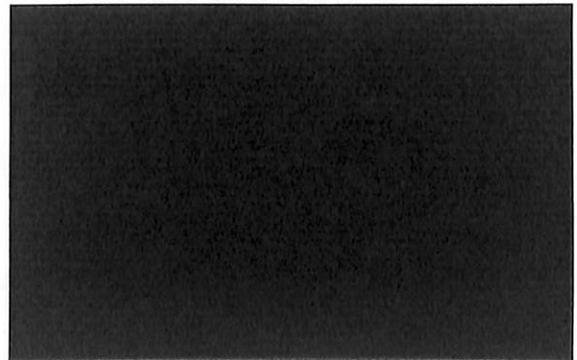
手作りの太鼓道場

織したりとか、地域の生活のマネジメントの主体になっていることがわかる。若い世代への継承も視野に入れて、旅行には若い人をアシスタントとして連れていく。さらに興味深いことは、太鼓保存会の後継者養成の方法である。小学生、中学生、高校生と年齢に応じて段階的に指導し、盆踊りなどは中高生に仕切らせ、青年部が見守る。上級生が下級生を指導し、さらに青年部が見守るというふうにして伝承の循環システムが出来上がっていることである。子供から年寄りまでほとんどの人が相互に顔と名前が一致しており、つながりができており、「太鼓道場」での太鼓の指導が地域ぐるみの人間教育としての場になっている。稽古にさいしては、挨拶など礼儀作法と靴をきちんと揃えることなどからはじめ、技術指導の原則は「おこらず、あきらめず、妥協せず」ということである。そのためかはじめや非行も少ないという。高校の太鼓部の指導も行っており、県大会、全国大会に出場する経験をするなかで、生徒たちが達成感を味わい、子どもたちが次第に自信をつけて元気になっていく姿を見るのは、ほんとうにうれしいと話してくれた。少子高齢化のなかで、とくにチンドンの楽師の養成は、難しく、長安寺地区だけで養成・継承していくのは難しいが、なんとか引き継ぎをしたいと座長の鈴木正利さんは思いを語る。

長安寺の太鼓とチンドンと公民館を軸にした地域生活ネットワークは、日頃市の他の地域でも公民館

を中心にしてそれぞれの地区の伝統芸能の保存と地域活動を通してネットワークが形成されており、それらがさらに連結して日頃市の独特の地域性を形作っているように見えた。その基礎になっているのが「郷蔵」地区という江戸時代以前にまで遡る自然村の単位が明治以降の行政村に切り替わっても生き続けた。明治から戦前にかけては軍馬としての徴用や農耕用の馬を飼う農家が増えたが、米不足は解消されず、粟や稗などの雑穀を主食としていた。そうした状況を変えるために伊藤小庄五郎が鷹生耕地整理組合をつくり大野林の開田を行い、明治末から大正初めにかけて80ヘクタールの水田を開拓した。庄五郎水田と呼ばれているのがそれである。しかし現金収入という面ではそれでも十分ではなく、戦前から戦後にかけては夏場の養蚕、冬場の炭焼という副業が現金収入源となった。

こうして零細な地域から余裕を生む地域へと改善の努力を積み重ねてきた。戦前は各地区の有力者を中心にそうした努力を行ってきたが、戦後は旧来の伝統的地域主義と新しい民主主義がむすびついて独自の公民館運動が生活改善運動として機能してきたように見える。公民館＝生活改善センターを拠点とする地域の生活改善運動である<sup>7</sup>。



船野章さん 2019.8.31

昭和22年に34歳で日頃市村長になった鈴木八五平はすぐに県下でもっとも早く公民館活動を始め、昭和24年6月1日に社会教育法により日頃市公民館を日頃市村役場内に設置し、自ら初代館長になると

7 昭和16年11月3日に開館した水沢公民館（旧水沢町表小路）が日本で最初の公民館ということである。正力松太郎が警察庁を辞し読売新聞の経営に乗り出した際、後藤新平が資金面でバックアップし、その恩返しに後藤新平のふるさと水沢に資金を寄贈してできたのが、水沢市後藤新平記念公民館である。昭和53年に隣接地に「後藤新平記念館」が新たに開館したことに合わせて「水沢市公民館」（現「後藤伯爵記念公民館」（水沢大手町4丁目1））と名称を改めた。

もに、各部落に部落公民館を設置した。それが現在の地区公民館の基である。昭和25年10月には日本ではじめて「国民健康保険」10割給付を実施し、同年の参議院選挙では、投票率99.8%と岩手県下で最高の得票率を記録したことは象徴的である。こうした公民意識の高まりが、一過性のものとして終わることなく、そのようにして形成された地域の精神が現在にまでさまざまな形をとって生き続けているところに、この地域の人々の意識に深く刻まれた歴史の記憶の強さを感じる。いまでも日頃市は大船渡市内

ではもっとも投票率の高い地域である。こうした歴史を市議会議員の船野章さんから聞くにつけ、日頃市の人々の地域に対する思いの強さを感じる。昭和の高度経済成長と過疎化を乗り越え、平成の低成長と少子高齢化をも乗り越えた日頃市地区は、さらなる少子高齢化を迎える令和の時代をどのように乗り越えていくのであろうか。切り札はやはり地域の歴史のなかで蓄えられ継承されてきた人間力のネットワークであるように思われる。

復興・大船渡  
全国  
ちんどん  
まつり

2019  
7.14日  
9:50開場 10:20開演  
大船渡市民文化会館  
リアスホール

最終回

【入場料】1,000円 全席自由

7.14(日) 11:00~ 屋外では自由にご覧いただけます  
7.13(土) 14:00~ さかり屋敷街 らんどん大パレード

プレイカイト

- 大船渡市民文化会館リアスホール
- サンピア 盛岡駅前 盛岡駅前
- マイヤ会館 盛岡駅前
- 大船渡商工会館(本所)
- 三好商店
- おもてなし館本店・北上本店
- フェザン店・盛岡駅前通り店
- 盛岡市市民会館
- 北上市文化交流センター
- 盛岡市文化会館
- 盛岡市体育文化会館
- 盛岡市文化センター
- 盛岡市文化会館アンパル
- 盛岡市文化会館
- 盛岡市文化センター

復興大船渡全国ちんどんまつり最終回のチラシ